

# キャリア教育を推進するための授業改善の役割に関する研究

葛上 秀文

(キーワード：キャリア教育，小中一貫，授業改善)

## 1 はじめに

キャリア教育という用語が，文部科学行政において，はじめて登場したのは，1999年の中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」のときである。そして，2004年に文部科学省内に設置された研究協力者会議が「児童生徒一人ひとりの勤労観，職業観を育てるために」を発表し，キャリア教育が，学校教育において，大きな役割を果たすようになってきている。

ただ，2011年に出された中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」を見ると，従来の進路指導等の取り組みでよい，という考えや，職場体験活動の実施をもって，キャリア教育とする考えが強く，十分浸透してこなかった実態があげられている。つまり，自分にふさわしい職業に就くということを重視する勤労観・職業観の育成のみが強調され，職業に就いた後も自分の役割を果たし続けていくための能力の育成という観点が軽視されてきたことがあげられた。

そうした状況を踏まえ，2011年の答申においては，キャリア教育で育成すべき力として，基礎的・汎用的能力を提示した。それは，4つの能力で示されている。第一に，「人間関係形成・社会形成能力」で，多様な他者の考えや立場を理解し，相手の意見を聞いて自分の考えを正確に伝えることができるとともに，自分の置かれている状況を受け止め，役割を果たしつつ他者と協力・協働して社会に参画し，今後の社会を積極的に形成することができる力である。第二に，「自己理解・自己管理能力」で，自分ができること，意義を感じることを，したいことについて，社会との相互関係を保ちつつ，今後の自分自身の可能性を含めた肯定的な理解に基づき，主体的に行動すると同時に，自らの思考や感情を律し，かつ，今後の成長のために進んで学ぼうとする力である。第三に，「課題対応能力」で，仕事をする上での様々な課題を発見・分析し，適切な計画を立ててその課題を処理し，解決することができる力である。最後に，「キャリアプランニング能力」で，働くことの意義を理解し，自らが果たすべき様々な立場や役割との関連を踏まえて，働くことを位置づけ，多様な生き方に関する様々な情報を適切に取捨選択・活用しながら，自ら主体的に判断してキャリアを形成していく力である。

これら4つの力を構造化すると，「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」を基盤として，その上に「キャリアプランニング能力」が育成するという関係で整理できる。また，この基盤の3つの力は，経済産業省が提案している社会人基礎力とも重なるものである。社会人基礎力としては，「前に踏み出す力」「チームで働く力」「考え抜く力」の3つの力が示されているが，これは，それぞれ，「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」に相当するものである。

それでは，これらの力をキャリア教育の中だけで習得することができるか，と問われれば，難しいといわざるを得ない。しかし，学校でのすべての学び，特に，教科学習を整理しつつ，関連づけていけば，キャリア教育の発展にもつながるし，学校教育の活性化にもつながる。そのことを，高槻四中校区の取り組みから検証していきたい。

## 2 キャリア教育の実践－「いまとみらい」科の取り組みから

筆者も，積極的に関わった高槻四中校区のキャリア教育については，前稿（葛上2014）で詳細に論じたので，ここでは，ねらい，内容，教育方法の3点について，校区の取り組みをまとめたものから整理したい（藤田他2015）。

## (1) ねらい

2010年に、文部科学省の研究開発学校制度の指定を受け、高槻第四中学校、赤大路小学校、富田小学校の高槻四中校区の改革の取り組みがスタートした。この校区は、それ以前からも、保育所、幼稚園、小学校、中学校、高等学校が連携して、子どもの教育を考える「つなぬく」という組織を作り、研究に取り組んできた。小中一貫教育の枠組みで、新しい教育課程の開発が目指された。

当時の校区の状況は、望ましいものではなかった。人間関係をうまく築けない子ども、本当かどうか確かめることなく、相手の言葉を鵜呑みにしてしまう子ども、自分の力で乗り越えることができない壁を目の前にしたとき、最後までやりきることができない子ども、そうした実態があった（藤田他2015, 31ページ）。校区は、こうした子どもたちの実態を引き起こすものとして、図1のように「学びの空洞化」をあげ、内容面、学び方、気持ちの面でのずれが、上述した子どもの実態を引き出していると考えた（藤田他2015, 32ページ）。

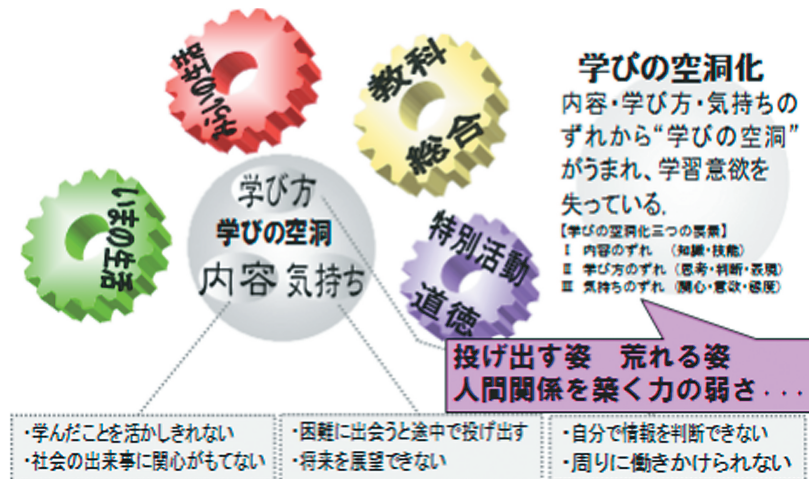


図1 学びの空洞化のイメージ

校区が、こうした子どもたちの実態を改善していくために設定した目標が「社会参画力」である。社会参画力は、前述した社会人基礎力、PISAのキーコンピテンシーなどを参考に、これからの子どもが習得すべき力を設定した。それが表1（藤田他2015, 69ページ）である。そして、その力を習得するものとして「いまとみらい」科の取り組みが設定された。

高槻四中校区の取り組みは、当初は、キャリア教育を意識した実践ではなかった。学びの空洞化という子どもたちの実態を改善するために、どのような目標を設定しないといけないか、校区の先生方が知恵を出し合い、到達したのが、社会参画力であった。当初は、大きな3つの柱が設定されただけであった。その柱だけでは十分でないため、さらに詳細な下位項目と、学年ごとの到達目標が設定された。その力と、キャリア教育の基礎的・汎用的能力は、重なる部分が多く、「いまとみらい」科の取り組みをキャリア教育の視点で整理することで、推進力が高まった。

## (2) 内容

「いまとみらい」科は、3つのカテゴリーで構成されている。1, 2年が主となる「家庭」、1年から9年まですべてに配置される「学校」、3年から9年までに配置される「地域・社会」である。学校での学びを社会につなげることをねらいとする「いまとみらい」科の取り組みで、中心となるのは、「地域・社会」のカテゴリーである。しかし、子どもたちにとっての身近な社会である「家庭」、そして、多くの時間を過ごす「学校」というカテゴリーを設定することで、学校での学びと社会をより円滑につなげられると考え、3つのカテゴリーを設定した。

まず、1, 2年生が主として実践している「家庭」のカテゴリーである。これは、単に家庭の手伝いをするための単元ではない。家の人が、自分たちの生活を支えるために、多くの仕事をしてくれていることを知り、その中で、自分たちができることを、自分たちで考え、それを役立つレベルにまで引き上げて実践すること、そして、授業後も、家族の一員としての役割をあたりまえのように続けていく単元である。子どもたちにとって成果が見えやすいこと、また、家の人の肯定的なフィードバックを得やすいことも、この単元を開発する上で大切にされ

表1 高槻四中校区 社会参画力ステップ表

四中校区社会参画力ステップ表			前期				中期			後期	
			1年	2年	3年	4年	5年	6年	7年	8年	9年
① 矛盾や困難を乗り越え、じりつ(自律・自立)して生きていく力	ア	規律性 社会のルールや人との約束を自分で考え、判断し、守る(行動する)力	学級生活において、必要なルールやマナーを知り、守る		学級生活において、必要なルールやマナーを考え、守る		学校や社会生活において、必要なルールやマナーを知って守り、行動する			よりよい社会の実現に向けて、必要なことを、自分で考え、判断し、行動する	
	イ	主体性 物事に進んで取り組む力	教員や友だちと共に楽しんで活動する。		自分の意見をもち、友だちと共に進んで活動する。		課題と自分との関係を知り、主体的に活動する。			課題と自分との関係を問い直しながら、主体的に活動する。	
	ウ	継続性 (おぼり強さ) 困難に出会っても投げ出さない力	教員や友だちと共に最後まで取り組む。		困難なことに出会っても、いろいろな意見やアドバイスを活かして、最後まで取り組む。		困難な課題の解決に向けて、必要な方策を考え、取り組み続ける。			実現が困難な課題に出会っても、自分ができることを考え、取り組み続ける。	
② 社会の中から課題をとりえ解決する力	エ	課題発見力 現状を分析し、課題に気づく力	身近な社会(家庭・学級・地域)を知り、よいところを見つける。		身近な社会(家庭・学校・地域)を知り、改善したい課題を見つける。		身近な社会(家庭・学校・地域)から、改善が必要な課題を見つけ、その原因を探る。			社会生活から、改善が必要な課題を見つけ、その背景や原因を分析する。	
	オ	計画実行力 自分たちが取り組める課題について、解決方法を考え、目標や計画を立て、それに合わせて行動する力	身近な社会(家庭・学級)の課題を解決するために、準備し、活動する。		身近な社会(家庭・学校・地域)の課題に対して、適切な解決方法を選び、計画を立て、それに合わせて活動する。		身近な社会(家庭・学校・地域)の課題に対して、適切な解決方法を選び、計画を立て、修正をはかりながら活動する。			解決が必要な社会(地域・高槻市)の課題に対して、適切な解決方法を選び、見通しをもって計画を立て、修正をはかりながら活動する。	
③ 人や社会に働きかける力	カ	コミュニケーション 意見の違いや立場の違いを理解し、自分の意見をわかりやすく伝えたり、相手の意見を丁寧に聞いたりする力	聞いたり話したりすることを楽しむ。		相手を意識して、聞いたり話したりする。		自分と異なる意見や立場を尊重しながら聞いたり話したりする。			多様な他者と、適切に意見のやりとりをする。	
	キ	働きかけ力 他人や社会に働きかける力	身近な人に呼びかける。		身近な人や地域の人に自分の考えや思いを伝える。		様々な人に協力を依頼するために、自分の考えを説明する。			より広い社会(地域・高槻市)の人に協力を依頼するために、自分の考えを適切に伝える。	
すべての面で	ク	振り返り力 学んだことにどのような意味があるのかとらえ、生き方に活かす力	活動を通してうまくいったことを考え、自分の生活に活かす。		活動を通して学んだことを考え、身近な自分の生活に活かす。		活動を通して学んだことを考え、身近な社会生活に活かす。			活動を通して学んだことを整理し、自分の生き方を考え、よりよい社会づくりに活かす。	

た。

次に、すべての学年で実践している「学校」のカテゴリーの実践は、二つの特徴がある。一つが、校種間の接続の実践である。保育所・幼稚園と1年の接続、6年(小学校)と7年(中学校)の接続。この実践で重要なのは、自分たちが受けた「おもてなし」を、次の年に自分たちが「おもてなし」することである。学ぶ場所が変わる、今までと違う子どもたちと学ぶというのは、子どもたちにとって不安が大きい、それを自分たちの問題として受け止め、子どもたち同士で、不安を減らそうとすることを大切にしている。自分たちも感じた不安、それを先輩が一生懸命受け止め、不安を軽減させてくれようとしたこと、そして、次年度、自分たちが、先輩として、後輩の不安を和らげることを考えることで、自分たちの1年間の成長を振り返る、そうした単元となっている。もう一つが、学校を自分たちでよりよいものにする、という実践である。行事をより面白いものにする、環境をより安全・安心なものにする、そのため知恵を出し合い、協力して実践するという単元となっている。自分たちの学校を、自分たちでよくしようとして日頃から考え、行動している子どもたちだからこそ、地域・社会の問題を、自分事として考えられるようになる。そうした意味で、「学校」というカテゴリーは、とても大切なものとなっている。

最後に、3年から9年で実践している「地域・社会」のカテゴリーである。地域で認められる実践を積み重ね、より複雑で、多様な問題の解決につながる実践につながっていく。地域の問題を、子どもたちの力で解決できることは、それほど大きくはない。しかし、地域の問題を子どもたちが一生懸命考え、行動することが、地域の人のエネルギーとなっている。子どもたちがこんながんばっているのだから、自分たちも。そのエネルギーが、「地域・社会」の実践をより豊かなものとしている。

### (3) 教育方法

教育方法も、社会参画力の育成につながるものとして、構想された。まず、社会の中から課題を捉え解決する力の育成として、学習サイクルを設定した。

「いまとみらい」科の教育方法を考える上で、これまでの総合的な学習の時間などの問題として、大きく2点が明らかになった。第一に、なぜ、この問題に取り組むのか、ややもすると、他人事のようなとらえ方があった。環境の問題について考えよう、福祉の問題について考えよう、それぞれの問題を考えることは大切であるが、そ

れが自分たちが解決すべき問題か、十分迫りきれてこなかった。そこで、「いまとみらい」科では、課題の開始時はもちろんのこと、取り組んでいる過程において、つねに自分と関連づけて考えることを重視する「S（スタンディング）」を設定した。第二に、課題解決のプロセスとして、PDCA サイクルを取り入れることとした。このサイクルは、組織的な課題解決として着目されているもので、子どもたちも、そのサイクルを何回も回すことにより、解決の手順を獲得していくこととした。それらの考えを整理したのが、図2である(藤田他2015, 79ページ)。校区では、SR-PDCA サイクルと呼び、1年から9年まで9年間、同じサイクルで回し続けた。課題解決の方法を明示化することで、子どもたちは、自分たちでサイクルを回しはじめるようになっていく。そのことで、子どもたちの課題解決できることがより深く、広がっていった。子どもたちのできるものがどんどん蓄積されていくので、その部分を、「いまとみらい」科の中で扱わなくてすむ。その分、より高度な部分の解決に時間を当てられるようになっていった。また、子どもたちは、日常の問題も、このサイクルを用いて解決しようと始めていった。提案することが、みんなにとっての「S」も考えないと、といった会話が聞かれるようになっていった。

それぞれの過程は、以下のようなねらいで設定された。

<S…スタンディング> 課題（テーマ）と自分との関係（立ち位置）を見つめる

子どもを傍観者にしないために、必ず「S」の時間をもつ。課題と自分との関係を見つめることで、問題意識、課題解決の意欲、学習意欲をほりおこす。学習を進める中で、常に「S」を問い、「S」を深めることを意識する。

<R…リサーチ> 調べ、考えを広げる

多様な情報からリサーチすることで視野を広げ、自分のできそうなことを考えて解決方法を見つける。(例 昔は？ 他の学校は？ 他の市は？ 他の国は？)

<P…プラン> 計画する

リサーチしたことを検討し、課題解決方法を具体化するために計画を立てる。

<D…ドゥ> 活動する

計画した社会参画・課題解決の方法を実践する。

<C…チェック> ふり返る

取り組んだ結果はどうであったのか、何がうまくいき、何がうまくいかなかったのか、それはなぜなのか学習(学び方)をふり返る。

<A…アクション> 活かす

学習サイクルを通して学んだことを活かして、自分を取り巻く社会をよりよくするためにできることを考え、自分の生き方に返し、次の行動意欲につなげる。

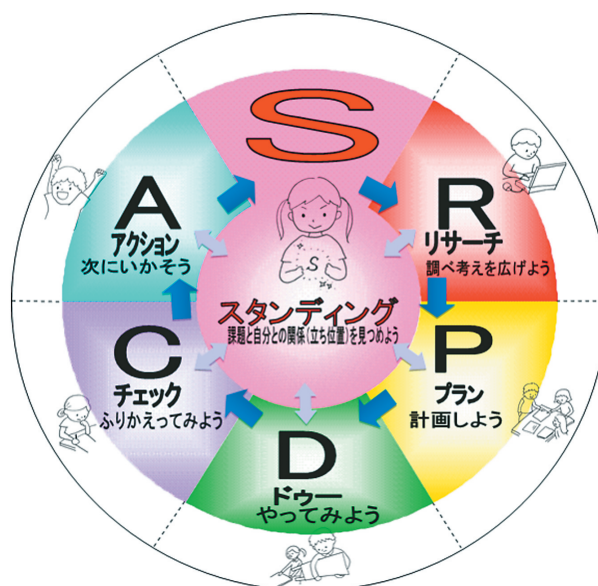


図2 SR-PDCA 学習サイクル

一方、「矛盾や困難を乗り越え、じりつ（自律・自立）していく力」「人や社会に働きかける力」を育成するために、「ソロⅠーコミーソロⅡ」の学習形態を取り入れた。「いまとみらい」科においては、原則、最初に自分の考えをまとめる「ソロⅠ」、その考えを交流する「コミ」、そして、コミュニケーションしたことを自分に返す「ソロⅡ」の流れで行う。解決に向けて、自分事として考えるとともに、協力しながら解決策を豊かにすることで、社会参画力の育成を図ることとした。

### 3 教科の授業改善による基礎的・汎用的能力の育成

「いまとみらい」科の取り組みは、子どもたちに一定の成長をもたらした。「いろいろなことについて一生懸命考えることができる」という問いに対して、「とてもそう思う」「そう思う」の合計が、2011年7月は59.9%だったのに対し、2014年7月には、80.8%に向上するなど（藤田他2015、160ページ）、社会参画力の育成に一定の成果が見られた。また、2012年から開かれている「いまみフェスタ」においては、子どもたちが1年間の成果を発表し、自分たちにどんな力がついたのか、報告し合っていた。また、「いまとみらい」科の取り組み以外にも、中学校の体育祭改革など、子どもたち主体の改善の取り組みが見られるようになった。

一方、課題も見られた。「いまとみらい」科の時間には、積極的に取り組む子どもたちが、教科の授業では、学ぶ意欲を持っていない様子が見られた。教科を学ぶ価値を十分伝えられない授業が多い現状では、致し方ないところもあった。また、社会参画力の育成を「いまとみらい」科の取り組みだけで保障するのも限界があった。そこで、2013年度から、教科の授業改善の取り組みが始まった。

#### (1) 教科の授業改善と「いまとみらい」科の関連

「いまとみらい」科は、答えなき問いを解決するため、一人ひとりが主体的に関わるとともに、協力しながら、答えらしきプランを導き出し、それを実践するとともに、その実践をつねに振り返り、よりよきものにしていく取り組みである。一方、教科の授業は、正解というものが教科書に示され、それをひとりで解決することが求められる。そのように考えると、二つの学びに接点はないように思われる。しかし、教科の授業で学ぶ内容も、子どもたちからすれば、新しく発見するものである。これまでは、それをいかに効率よく教えるか、に力点が置かれていたが、子どもたちが問いを解決することを重視する現在の学習観からすると（例えば、PISA型学力、21世紀型学力など）、子どもたちが協力しながら、課題解決する学習方法が望ましいと考えられる。そのように考えると、「いまとみらい」科の学びと、教科学習は、図3のように校内研等で提案し、実践化していった。教科学習の場合、協働で解決したものをひとりで解決できるものにしなないといけないが、「いまとみらい」科においても「ソロⅡ」の時間を設定し、学んだことを振り返る時間を設定していたので、大きな問題とはならない。そこで、高槻四中校区においては、社会参画力をさらに育成するため、教科の授業改善を、「いまとみらい」科と接合させて設計した。

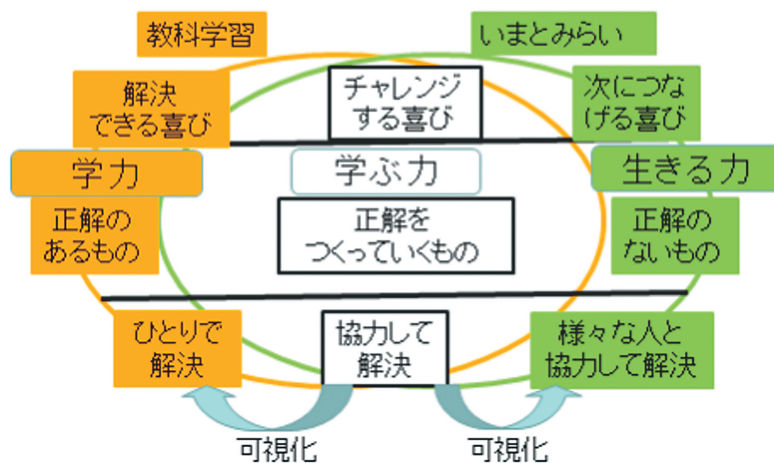


図3 四中校区「学ぶ力」のイメージ

## (2) 教科の授業改善—学習サイクルにもとづく授業設計

社会参画力の育成を、教科の授業においても進めていく上で、「いまとみらい」科の基本である学習サイクルと学習形態を取り入れた。教科の授業実践においても、重視されたのが、「S（スタンディング）」である。これまでの、どちらかといえば、教師が説明し、子どもたちはそれについていく、という授業から、子どもたちが、既存の内容を活かして、本時に獲得すべき内容を発見するために、教科の学びを自分事として考える「S」が重要となった。そのために、授業者は、この問題を解いてみたい、という「めあて」を示す必要があるとともに、その「めあて」を、子どもたちが解決していける道筋を示す必要がある。子どもたちが、自力解決していくためには、既習事項を考慮し、新たに学ぶことを明確にする必要がある。そのことを「R（学びの倉庫）」として整理し、子どもたちに明示化することとした。

めあてを解決するために、どのようにすれば解けるか、計画を立てないといけない。その過程を「ソロⅠ」として位置づけ、「P（プラン）」の時間として設定した。そして、それぞれが考えた方法を交流し、解決する過程を「ソロⅡ」として位置づけ、「D（ドゥ）」の時間として設定した。さらに、どのように解決したか、自分なりに整理する過程を「ソロⅢ」として位置づけ、「C&A（チェック・アンド・アクション）」の時間として設定した。そして、そこで整理したことを、「R（学びの倉庫）」に追加する、という授業設計を行った。それを図示化したものが、図4である（藤田他2015, 183ページ）。

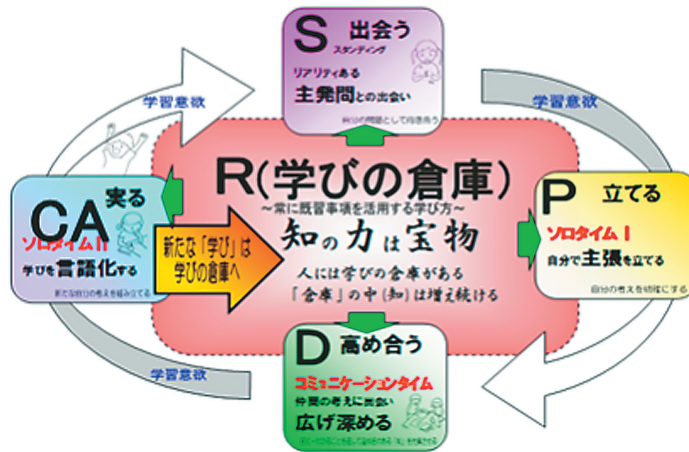


図4 教科の学習サイクル

具体的な授業設計を、小学5年算数「直角三角形の面積」（啓林館）を例に示す。子どもたちは、既習事項として、長方形、正方形の面積を学習している。これらは、1cm四方の正方形が1平方センチであることをもとに、例えば、縦4cm、横6cmの長方形では、1平方センチの正方形が縦に4個、横に6個並び、併せて24個あるので、24平方センチであることをつかみ、そこから、長方形の面積は、縦×横で求められることを学んでいる。

直角三角形の面積を求める場合も、既習事項の確認(=学びの倉庫)から、長方形の面積の求め方を振り返る。そのときに、縦×横という公式だけを思い出させるのではなく、どのようにして、その公式を導き出したかを振り返ることが重要となる。そうすることで、本時の問いを解決する道筋、すなわち、直角三角形を変形などして、1平方センチの正方形が何個あるか導き出せばよい、ということに子どもの意識を向かわせられるのである。

子どもたちは、1cmのます目が入った直角三角形に切られた紙を使って、直角三角形の面積の求め方を探るのである。啓林館の教科書も、そのような過程で、面積を求めるよう設計されているが、そのためにも、既習事項の確認が重要となる。

子どもたちは、倍積変形（同じ直角三角形を合わせて、長方形をつくる）、等積変形（半分の高さのところ切り取り、移動させて、長方形をつくる）で面積を求めるようになるが、どちらも、既存の長方形の面積の求め方に行き着くのである。そして、子どもたちは、「ソロⅡ」の時間に、直角三角形の面積も、形を変形するなどして、1平方センチの正方形がいくつあるか考えることによって求められることを学びの倉庫に付け加えるのである。

### (3) 教科の授業改善と社会参画力の育成

四中校区が教科の授業改善に取り組んだのは、「いまとみらい」科の時間に一生懸命取り組んでいる子どもが、教科の授業では、学ぶ意欲を持てていなかったためである。さかのぼって、「いまとみらい」科になぜ取り組んだかと考えると、学びの空洞化と呼ばれる子どもたちの実態を改善したいと考えたからである。校区は、学びの空洞化の改善を図るため、社会参画力という概念をたて、取り組みを進めた。

教科の授業改善と社会参画力の育成にどの程度関連があるのか、分析することは難しい。子どもたちは、「いまとみらい」科にも取り組むとともに、教科の授業も受けているからである。しかし、全体として、どのように社会参画力が高まっているのか、分析することは有効であろう。校区では、年に2回（2013年度は3回）、小学4年から中学3年までの子どもたちに効果測定アンケートを実施している。2013年度に、質問項目を見直したため、今回は、2013年度、2014年度の結果から、子どもたちの社会参画力の育成の効果を分析したい。

まず、「矛盾や困難を乗り越え、じりつして生きていく力」である。基礎的・汎用的能力の「自己理解・自己管理能力」に相当するこの項目では、「物事を前向きに考える」「失敗してもあきらめずにもう一度チャレンジする」を質問した。その結果が、図5、6である。年度の進行によって、徐々に肯定的な意見が増えていることがわかる。

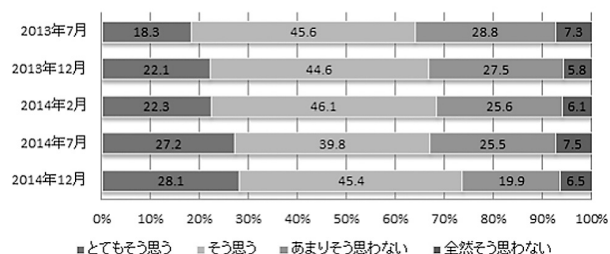


図5 物事を前向きに考える

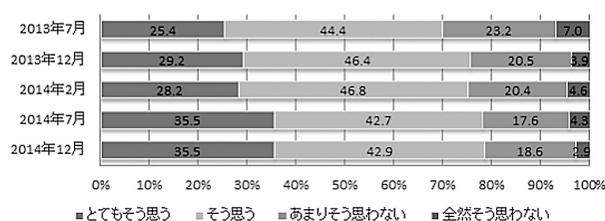


図6 失敗してもあきらめずにもう一度チャレンジする

次に、「人や社会に働きかける力」である。基礎的・汎用的能力の「人間関係形成・社会形成能力」に相当する項目では、「相手の気持ちを考えて行動できる」「いろいろな人のもちあじに気づくことができる」を質問した（図7、8）。この項目も、年度の進行に伴い、肯定的な意見が増えている。ただ、他の項目に比べ、変化の割合が小さく、課題があるともいえる。

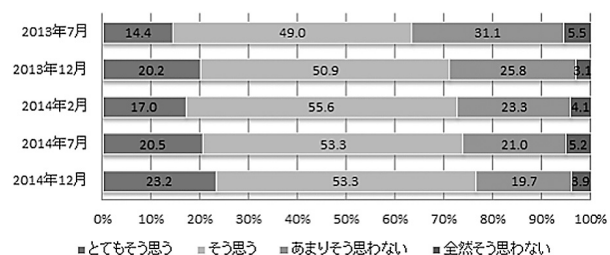


図7 相手の気持ちを考えて行動できる

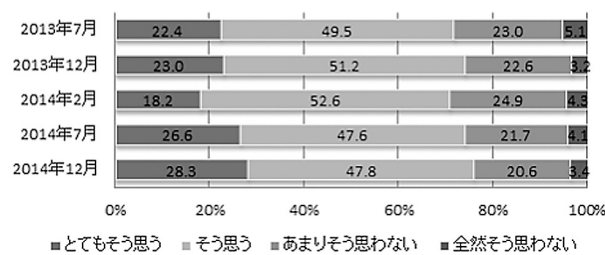


図8 いろいろな人のもちあじに気づくことができる

最後に、「社会の中から課題を捉え、解決する力」である。基礎的・汎用的能力の「課題対応能力」に相当する項目として、「ものごとをさまざまな視点から考える」「わからないことがあると、どのように調べたらよいかわかる」を質問した（図9、10）。これも、年度の進行によって、肯定的な回答が増加している。

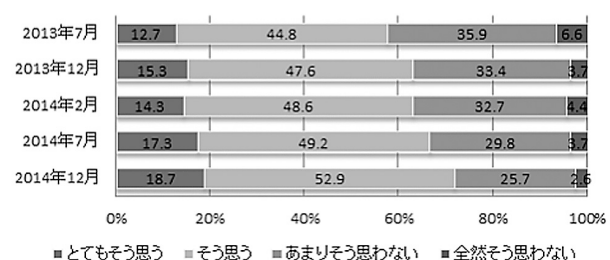


図9 ものごとをさまざまな視点から考える

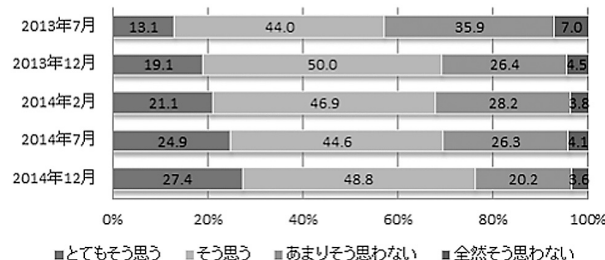


図10 わからないことがあると、どのように調べたらよいかわかる

社会参画力の3観点にそって、効果測定の結果を分析したが、どれも一定の成果が見られた。キャリア教育で育成すべき力である基礎的・汎用的能力においても、教科の授業改善等を合わせて実施することが求められているが、校区の取り組みは、そのことを示しているといえるであろう。

#### 4 まとめと今後の課題

これまで、高槻四中校区においてキャリア教育の一環として取り組まれた「いまとみらい」科、それに続く、教科の授業改善の取り組みを概観した。その結果、キャリア教育で育成すべき力である基礎的・汎用的能力を校区として読み替えた社会参画力の育成が進んだことが明らかになった。

この校区で、社会参画力が高まった要因として3点挙げられる。第一に、子どもの現状を整理し、その状況を改善したいと先生方が議論し、導き出されたのが、社会参画力であった。こういう力をつけねばならない、という他律的なものでなく、先生方が自ら導き出したことが、重要であった。第二に、「いまとみらい」科という新しい教科を構想することにより、目標の達成に向けて、教育内容や教育方法を自由に設計できたことである。しかも、当初からキャリア教育を目指すのではなく、校区としてカリキュラムを考える過程で、キャリア教育と接合していったため、カリキュラムを当初構想する段階で、既存のキャリア教育の内容に引っ張られなかったことも、重要であった。第三に、「いまとみらい」科で一定の成果が出たときに、そこにとどまらず、社会参画力をさらに育成するためには、教科の授業改善が必要と捉え、しかも、成果を上げている「いまとみらい」科の取り組みと接合する形で進めたことである。「いまとみらい」科が成果を上げた要因を分析し、その枠組みを教科の授業改善に活用することで、子どもたちも教師も円滑に改善に取り組むことが可能となった。

今後の課題として、2点あげられる。第一に、教科の授業改善のさらなる推進である。公立学校では、毎年、多くの教師の異動がある。この校区でも研究が始まった当初からの教師は数えるほどとなった。教師が入れ替わる中で、さらなる授業改善が必要となってくる。第二に、教科指導以外の学校の活動の改善である。基礎的・汎用的能力の育成は、生徒指導、学級経営など、学校の取り組みの様々な場面で取り組んでいく必要がある。これまでの取り組みを見直し、「いまとみらい」科、教科の授業改善と連動しながら、改善を進めていく必要がある。

#### 参考文献

- キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議（2004）「児童生徒一人ひとりの勤労観、職業観を育てるために」 文部科学省 HP
- 葛上秀文（2014）「キャリア教育のカリキュラム開発に関する実践的研究」鳴門教育大学研究紀要29, 148-159
- 経済産業省（2006）「社会人基礎力に関する研究会「中間とりまとめ」」 経済産業省 HP
- 藤田晃之監修（2015）「ゼロからはじめる小中一貫キャリア教育-大阪府高槻市立第四中学校区「ゆめみらい学園」の軌跡- 実業之日本社
- 中央教育審議会答申（1999）「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」 文部科学省 HP
- 中央教育審議会答申（2011）「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」 文部科学省 HP
- 文部科学省（2012）「小学校キャリア教育の手引き（改訂版）」 教育出版



# **A Study on connection of promotion of school subjects and the improvement of the career education**

KUZUKAMI Hidefumi

This article surveyed the action of the Takatsuki fourth Junior High School precinct and clarified that a social participation of children increased. The factors that a social participation increased include three points. Primarily teachers set an aim autonomously and are to have pushed forward an action. Secondly, education contents and education methods were thought about deeply because they envisioned the new curriculum called the “Now and Future” course. Third, on the extension of the action of the career education, it is to have envisioned an action of the improvement of the subject.

Future problems include improvement such as further promotion of the improvement of the subject, and improve student instruction and the classroom administration.